2 Ep- 1

子どもの家庭生活と共感性、個別性、セルフ・エスティーム（第１報）　研究目的と方法

○木田淳子*、奈良由美子*、藤田祥子、守野美佐子、高野愛子、辰巳理恵子、野口知有**、藤本多賀子**

（*大阪教育大、**大阪教育大・院）

＜目的＞　子どもの問題状況がとみにその内面的性格を強めてきているなかで、子どもの人間性の養成という視点から家庭生活を見ていく。具体的には、人間性の１つの基本をなすと考えられる共感性、個別性、セルフ・エステイームが、子どもの家庭生活実態の諸側面とどのように関わりながら形成されるかを明らかにする。

＜調査実施方法＞　大阪府下全域を調査地域とし、1997 年 10 月から 1998 年 3 月にかけて、小学 5 年生、中学 2 年生、高校 2 年生を対象に、質問紙法に基づく調査を実施した。実施に当たっては各学校の教員の協力を得、各クラスにおいて配布、記入、回収を行った。有効回収票は、小 5 が 736 票、中 2 が 1331 票、高 2 が 1660 票である。調査実施学校数および学級数は、小 5 が 28 校 28 学級、中 2 が 26 校 45 学級、高 2 が大阪府下全学区の公立高校普通科 21 校 43 学級、工業科 3 校 6 学級、商業科 1 校 2 学級、私立女子校 2 校 2 学級である。小学校、中学校については、地域性に偏りが生じないよう大阪府下の 8 つの行政ブロックを抽出単位とし、高校生については特に地域性と学力に偏りがないよう全学区を基本的な抽出単位とし、所属実態と学力バランスを考慮した。

＜調査内容＞　家庭生活を、心理的関係、コミュニケーション、家事労働、余暇活動、親の生き方、ジェンダー、家族問題への対処の 7 側面で捉え、さらに子どもの性意識・性情報を加えた。ただし、小 5 では性意識の質問項目を除いている。また、共感性については加藤隆勝らの共感性尺度、セルフ・エステイームについてはローゼンバーグの尺度を用い、個別性については今回の調査で新たに 2 項目からなる尺度を構成し用いた。全質問項目数は小 5 が 190、中 2、高 2 が 192 である。